

解放と概念，誓う肉体の言語

— 米軍政期韓国の言語政治学，英文学徒詩人たちと新語辞典を中心に —

黄 鎬 徳

翻訳 沈 正 明

一つの民族の言語はわれわれに彼の民族の語彙を与え，その語彙は彼の民族のあらゆる知識に関する充実かつ権威ある記録である。一つの民族の語彙が，相異なる時代に有する相異なる状態を比較するだけで，われわれは彼の民族の進歩にかかわる観念を形作ることができる。すべての学問には名前があり，一つの学問の中のすべての概念もまた名前を持つ。

— デイドロ『百科全書』中「百科全書」項目から

1 英語の時代

— 1945年の秋，「通訳官政府」と「人民共和国」のあいだ

1945年9月7日，解放された京城，ソウルの上空を，B29が飛んでいる。そこから，まるで戦時ビラのように，「朝鮮人に告ぐ」という米軍政命令第一号がひらひら舞い落ちる。9月1日から5日のあいだに，すでに30万枚のちらしが投下された。国際法的には九月九日から独立国家の憲法に準ずる位相を占めるようになる，その文書¹⁾の一節から話を始めよう。布告第一号には，以下のような言葉が書いてある。

太平洋方面米陸軍総司令官マッカーサー布告第一号（1945.9.9）：朝鮮人民に布告す

（前略）本官は，朝鮮人民が長期に渡り奴隷のように暮らしてきた事実ならびに適切な時期に朝鮮を解放独立させようとする連合国の決定を肝に銘じている。朝鮮人は，われわれが朝鮮人を占領する目的が，降伏文書を履行し，朝鮮人の人権および

宗教上の権利を保護することにある旨を了承すべきである。よって、本官は、太平洋方面米陸軍部隊総司令官である本官に付与された権限に基づき、北緯三八度以南の朝鮮および同住民に対し、軍事的管理を行うべく、以下のごとき占領条件を発表する。

(第一条) 北緯三八度線以南の朝鮮領土および同人民に対する一切の統治権は、当分の間、本官の権限の下に施行される。

(第二条) 政府等、すべての公共機関に従事する有・無給の職員ならびに雇用人、その他の重要事業に従事する者は、別途の命令があるまで、従来の正常機能および業務を全うすべきであり、一切の記録および財産を保護し保存しなければならない。

(第三条) 住民は、本官および本官の権限により発布される命令に直ちに服従すべきである。占領軍に対する反抗行動や、秩序保安を攪乱する者は、容赦なく厳罰に処する。

(第四条) 住民の財産権はこれを尊重する。住民は、本官の別途命令があるまで、日常的な職務に従事せよ。

(第五条) 軍政の期間中は、英語をすべての目的のために使用する公用語とする。英語原文と朝鮮語、日本語の原文の間に、解析または定義に関する不明な点または異なる点がある際には、英語原文が適用される。

(第六条) 新たな布告、布告規定の公告、指令および法令は、本官ならびに本官の権限の下に出され、諸君が履行すべきところを明記する。

1945年9月12日、米軍政庁(MG, American Military Government 以下、米軍政庁)が樹立されると、英語は占領下の公式用語あるいは公用語となった。上記の布告第五条は、帝国日本の統治の下、日本の「コクゴ(国語)」を公用語としていたこの地が、またもや「主なき地」と見なされることで、新たな二重言語の空間に再び入っていくであろうことを予告していた。第二四軍団の21隻の艦隊が、1945年9月2日に沖縄を出発し、1945年9月8日、灯火管制の中の仁川に上陸する。それから何週間も経たないうちに、米軍と行政要員は二万五千人を上回るようになる²⁾。日本占領の任務を遂行するために養成された二千人余の米陸海軍将校たちの大多数は、マッカーサー占領軍が日本の行政体制をそのまま使うことを決めると、実質的に「太平洋戦争の戦場で真の軍政が樹立された唯一の場所」であるソウルに再配置された。韓国の米軍政庁は総計二千人余に上る将校たちで溢れかえ、彼らの相当数が日本語を習ったことがあるとはいえ、この「将

軍の政府」には多くの「通訳」たちが必要とされた。阿部総督はじめ総督府の残留官吏たちは、米国の主な情報提供者兼通訳として、また米軍政の現地管理面接官として数ヶ月間活動し続け、占領下の数週間に渡って、350冊の備忘録および占領マニュアルを英語で作成し、米軍政庁に提出した³⁾。日本人官吏たちは、通訳や諮問役として、人民や労組、自治などの名前をつけたさまざまな朝鮮人委員会が「接收」した事業場や機構などを、米軍政が取り戻すことにも協力した⁴⁾。彼らが提供した情報と、米国の一貫した防共路線に則り、米国は駐屯軍司令官にとって統制が容易な中央集権化方針を決定する。言い換えれば、官僚体制の支配が残存するようになったのである。日本とは対照的に、韓国では、国家機能がかえって強化された。警察力に重きが置かれ、官僚の数もまた倍加された⁵⁾。米軍政は、その先発過程を通じて、およそ17万の職位を充員することになる。

過渡期における官僚の先発基準は、英語駆使力と「非共産主義者」の二つだった。前者の基準は明確だったが、後者の基準は漠然としており、また恣意的でもあった。英語に精通した朝鮮人の中には、呂運亨（ヨ・ウンヒョン）の弟である呂運弘（ヨ・ウンホン）のような左派の人物もいたものの、これから米軍政の下で活躍することになるであろう「話が分かる」朝鮮人の大多数——米国で、あるいは韓国にある米国系の宣教教育機関で教育を受けた専門家や教育界の指導者たち——は、実際のところ、李承晩（イ・スンマン）、趙炳玉（チョ・ビョンオク）、張澤相（チャン・テクサン）、金東成（キム・ドンソン）、李印默（イ・ミョムク）（ホッジ中将の通訳官）などの人物と、彼らと懇意な植民地期の既得権勢力、すなわち金性洙（キム・ソンス）、宋鎮禹（ソン・ジヌ）、張徳秀（チャン・ドクス）、李容暲（イ・ヨンソル）、金用茂（キム・ヨンム）、李仁（イ・イン）、白樂濬（バク・ナクジュン）などの韓国民主党一派を指し示すものとなった⁶⁾。韓国語の読み書きができるほんの少数の米国顧問官たち、すなわちホッジの顧問であるジョージ・ウィリアムズ（George Z. Williams）やクラレンス・ウィームズ（Clarence Weems）、ウォン・ハンギョン（H.H. Underwood）などは、来韓宣教師たちの子弟であり、先述した韓国民主党勢力と親の代からつながっていた。

韓末と植民地期に続く、第三の通訳時代が再び幕を開けた。大韓民国樹立の直前まで、行政分野だけを取ってみても、英語に通じた親米の官僚群が四百人余に達していた。彼らのほとんどは富農や地主の出身であり、米国留学を経験した者たちであった。彼らは米軍政の名前で官僚機構の再編と主要政策の実行を行い、すでに過酷だった米軍政の方針をより一層歪めることもあった。米軍政は、「通訳官政府（an interpreter's government）」という別名でも呼ばれた。1946年の大邱十月抗争当時すでに、韓国人の

恨みの矛先は親日警察や官僚とともに通訳官にも向けられていた⁷⁾。ソウル駐在の米國務省の顧問官ランドン (William Langdon) と、金九 (キム・ク) とともに親しかった申翼熙 (シン・イクヒ) の以下の二つの陳述を見比べてみよう。

軍政が富裕層を最優先し、左派を排除しているから、われわれは最初から割に合わないほど裕福で保守的な人たちを選んだのかもしれない。……実用的な目的のために、われわれは英語を駆使する人たちを採用しなければならなかった。ところが、この人たちとその親友たちは、主に金持ちの階級の出だ。それは、英語が韓国人たちのあいだでは贅沢だったからだ⁸⁾。

われわれは、軍政の通訳たちによって任命された官吏をみんな解任しなければならない。八・一五直後に、すべての親日派と民族反逆者は身を隠してしまった。……なのに、彼らはその後また現れ、通訳たちを買収し、都庁、区庁だけでなく警察の職位まで手に入れた。われわれはこの人たちを追い払わねばならず、それと同時に、外国に対する依存心を捨てなければならない⁹⁾。

ホッジの通訳官である李卯黙をはじめとする通訳官勢力は、米軍政が実施される以前から朝鮮半島のほぼ全域において組織された朝鮮人民共和国を赤色集団だと公言し、中途派に近い呂運亨や安在鴻 (アン・ジェホン) に対してまで「親日派」だと罵倒した。たとえば、『反逆者と愛国者たち』のような小冊子やビラが、ソウルのいたるところにばらまかれた。「親日、民族反逆者、協力者といった言葉の次に親米が付け加え」¹⁰⁾ (ホッジ中将) られ、中には、英語で作成されたものや、さまざまな組織と新語を含む文書も少なくなかった。占領地軍事政府の権能にもかかわらず、最初の数ヶ月間、あるいは軍政期間中引き続き、米軍政と英語はかつての「コクゴ」や「大日本帝国」のような力を持ち得なかったのは事実である。そのことは、この二重言語の状況が、ただの階級方言の問題ではなく、(国際法的合法性や、強力政治的な力の偏重はどうであれ) 少なくとも二つの主権が戦う内戦、あるいは二重主権が競合する状態にかかわっていたということを窺わせる。

ある新語辞典は、1945年8月15日が産んだ代表的な新語である「親日派」を、米軍政とその協力者たちとは異なる仕方で定義している。

親日派・民族反逆者 過去、日本帝国主義政治に積極的に協力した者と、民族に対する反逆的行為を敢行した者を指しており、朝鮮人民共和国・中央人民委員会が一月三十日に新聞記者団体に対し発表した、親日派—民族反逆者規定の原則は以下の通りである。(一) 朝鮮を日帝に売り飛ばした売国奴およびその関係者 (二) 日本天皇から爵位を受けた者および中枢院顧問参議等 (三) 日帝統治時代の高官 (総督府局長知事) (四) 警察憲兵の高級官吏 (警視士官級) (五) 軍事高等政治警察の悪質分子 (警視級以下であっても人民の怨恨の標的となった者) (六) 軍事高等警察の秘密探偵の責任者 (七) 行政司法警察を通じ、極めて悪質な分子として人民の怨恨の標的となった者 (九) 皇民化運動・志願兵徴用等の問題における理論的・政治的指導者 (十) 戦争協助またはファッショ的性質を持った団体 (大義党・一心会・緑旗連盟・一進会・国民協会) 等の主要責任幹部。さらに、八・一五解放の民族反逆者は (一) 民主主義的団体あるいは指導者を破壊暗殺するためテロ団体を組織し、それを指導する者、その団体を背後から指導・操縦する者、またはその行動を直接実行する者 (二) 美軍政またはMP・MGに誣告し、MP・MGの力を借りて民主主義的指導者を検挙・拷問・虐殺する者 (これについては地方に多数の例がある) (三) 日本軍から大量の軍需品を買い占め、民衆生活に直接の影響を与え、経済界を攪乱し、一躍にして巨富を築いた悪徳商人。以上に示した者でも、真実なる悔悟により民主主義朝鮮の建設のため最大の誠意と謹慎を尽くす際には、必ず容赦するとする¹¹⁾。

朝鮮人民共和国と中央人民委員会が、国際的には一切認められず、紙切れの上の政府に過ぎないかのように見えたとしても、自生的権力機構としての地方人民委員会の影響力は、朝鮮戦争が勃発するまで、革命的代案国家の政治的な象徴として存在していた¹²⁾。それに、米軍政初期には、事実上、二重権力が働いていたとの見方もある¹³⁾。

競合する諸力は、競い合う言葉と、それらの言葉に対する解釈の競い合いを生み出した。言葉、とりわけ新しい言葉が溢れて出ていたものの、その内包する意味はつねに不確かであり、ほとんど真逆の意味で用いられることもあった。今や、新語と外来語、外国語の束が、解放後再び活性化された「ハングル」の空間に、洪水のように押し寄せてきていた。狂暴な「コクゴ」の時代が終わり、ハングルとウリマル (われわれの言葉: 訳者) の時代が開始されたと思いきや、始まったのは新語の時代、新語辞典の時代であり、英語の時代、英語辞典の時代であったのだ。廉想涉 (ヨム・サンソプ) の小説に登場す

るある人物は、こう嘆いている。

くそつたれ、今じゃあ「国語」が二つになってやがる！二つだぜ！おらの孫のやつが小学校卒業するぐらいになりゃあ、はがき一枚受け取ったって、一度翻訳するだけじゃ読めなくならあ！ふん、おらあ、生きてるうちにまたこんな目に合うと誰が知ってか。呆れ返るったら、ありゃあしねえ¹⁴⁾

2 辞書の時代

一英語通、英文学徒たちの選択

誰もが、「話がわかる者」たちの行方を見守っていた。李馥河（イ・ヤンハ）と権重熙（クオン・ジュンヒ）は、日本語辞書を書き写しながら、米国に話しかけるための道具である韓英辞典と英韓辞典を作っていた。それ以前にもすでに多くの英語辞書が出ていたが、1930年代以降の言語状況を反映した英韓辞書にしてはこれ以上のものもなかったため、空前の売り上げを記録した。そのうえ、英語辞書の販売高は、国語辞書の出版ブームにもつながった¹⁵⁾。

米軍政下にいるんだから、どうしても私たちが西洋文化を継承して何かわからないと独立国家の振舞いはできないだろう、そうじゃないとまた日本の属国になってしまう、どうすればいいかと言うと、まあ別に大したことはないんじゃないか、私たちには年取ってる人も多いし、もっと勉強する機会もない人たちだから……では何をどうするかと聞くと、だいたい十あまりの人が、辞書が必要だということには異見がなくて。(中略)「ABC」までにはできてたと。私と合作したのは六・二五直前ぐらいだけど、「ABC」はできてるから、私に「DEF」をやれと。日本の辞書を書き写せというわけ。私たちがすぐ辞書を作れるわけないでしょ。市川三喜先生が作った「ポケット用リトルディクショナリー」を写していくことにしたさ。それをやてるうちに李馥河（イ・ヤンハ）はアメリカへ行ったよ。私が仕上げたんだけど。それはほとんどそのまま翻訳したけど、言葉をどうするかが問題なんだよ。日本時代には韓国語が使えなかったから、英語の単語一つ一つをどうウリマルにすればいいのか……漢字はそのまま書くことにした。たとえば、「school」なら、「学校」って漢字で書いといて、それをウリマルで「학교」って書いた。だから、「school」に対し

て同じ漢字を用いて、日本語とウリマルとで違う読み方をするわけだよ。「哲学」なら、日本語だと「てつがく」だけど、ウリマルでは「철학」になる。漢字は使わないうで漢字の音をもってウリマルだとして、日本語は日本人が使ってた漢字をそのまま書くのさ。それしか方法がなかった。そうじゃなければ、何十年も待ったって、ウリマルが生まれるかどうかわからないから、しょうがない。日本人が後から言うのを聞くと、西洋人の言葉を翻訳するのに数十年がかかったけど、それを学んで韓国人は節約できたとき。それは本当のことだよ¹⁶⁾。

しかし、いざ最も米軍政に近づいた文人は、革命的ロマン詩人の薛貞植（ソル・ジョンシク）だった。米国でシェークスピアを勉強して戻ってきた彼は、1945年11月、米軍政によって世論局長に抜擢された。彼はすぐさま過渡立法院の事務次長を経て、立法委員副秘書長に上り詰める。しかし、その彼でも、すでに1946年末には、「血」と理念の両面において米軍政から離れ、「自由社会主権」と「人民共和国主権」¹⁷⁾を等価に置く世界観に傾きつつあった。何より「親日派」が幅を利かせている状況が、彼を共産主義に傾かせていた。彼が書いた数少ない小説の一つ「フランシス・ドゥセット」（1946年）は、1940年代初めの朝鮮文壇における民族間恋愛物語（「内鮮恋愛」と「内鮮結婚」）の延長線上で読むことができるが、彼自身の留学時代の体験を基にしたものと思われる。ブレイクを愛し、その主題で論文を書く韓国人留学生と、カナダ人留学生の愛と決裂を描いた作品である。少しの間、米軍政に希望を抱いた彼が、その気持の経路をたどり直した小説であるとも言えるが、「フランシス・ドゥセット」で韓国人と米国人（実はカナダ人）の恋愛は、結局のところ、血と地、そして人種によって決裂してしまうのだ¹⁸⁾。

フランシスは、

「あなたが誰だか、私にはわからないわ。どうしてわかるでしょう。あなたも私が誰だかわからないはずよ」

と言って、上気した僕の顔をじっと覗き込んだ。僕はどう答えたものかわからなかった。僕の身体の中を目をつぶって回っていた血が、一気に停止してしまうような気がした。

フランシスの灰色の瞳は、相変わらず死んだ魚のように白く澄んでいた。「死んだ肉のかたまりを抱いていたんだ。」しかし、僕の肉の中にある血は恥ずかしげもなく、未だ暖かい女の鼓動を知りたがった。水族館の中でゆらゆら泳ぐ人魚、どうしても

一緒に流れることなどできない、この血のマネキン——数多いアメリカ女のまたひとり、一千里も一万里も離れ、遠くの故郷ソウルの寒い冬にも、オンドル部屋の暖かいところで背を向けて座るオクヒに、無駄な手紙ばかり書いていてどうする！

僕は起きて座った。ジャズの音がまだ聞こえ、自動車が通り過ぎる音が絶え間なく聞こえてきた。フランシスはしばらくただ横になっていたが、ため息を吐きながら起き上がった。疲れ果てた人のため息だった。やはり、自分たちの、書かれた古い慣習の律法から抜け出すことなどできなかつたと、告白するようなため息に聞こえた。言葉や思想では理解できても、やはり血でもって知ることなどできない、遠い地で育った肉体のなかに入っていこうなど、到底考えられないということに気付いたため息だった。

フランシスは僕の前に来て、うつむいた僕の頭を両手で持ち上げ、そっと口をつけた。それから、気が抜けた人のように背を向け、ガラス窓をずっと眺めてから、扉を開けて出て行った。鳥が飛び去ってしまった鳥かごのような部屋だ。僕は、遠くから引っ張ってきたトランクを、長い間、見下ろしていた。四方から、相変わらずジャズの音楽が聞こえてきた¹⁹⁾。

薛貞植は、一九四七年八月に米軍政の職位をすべて自任し、すぐさま英文日刊紙『ソウルタイムス』の主筆兼編集局長に移していった。すでに一九四六年八月に朝鮮文学者同盟の外国文学部委員長に選ばれ、九月に朝鮮共産党に入党していた彼であるだけに、不思議なことではなかった²⁰⁾。薛貞植は、自分の書いた詩のそこかしこに、米とパンに対する渴望と、人民、自由、民族への希求を記していただけでなく、ロマン主義時代にしかできないような形で「概念」と「激情」を結び合わせることで、帝国主義に対する決然とした反対をも書き込んでいた。米軍が去った後に出版された彼の第三の詩集『諸神の怒り』（一九四九年）は、出版されるやいなや販売禁止処分を下されたのであり、それにつぐ検挙令は彼を「国民保導連盟」に走らせた。帝国日本が創案した制度化された思想転向と、法と措置のあいだの流動的な空間は、後期植民地においてもそっくりそのまま繰り返された。

『京郷新聞』と梨花女専を行き来していた鄭芝溶（チョン・ジヨン）の変化は、より劇的である。概念と人生、政治と詩、法定立的暴力と誓いが縫合されていたその時代に文学をすることについて、鄭芝溶はこう書いている。「今では、「文学概論」や「文学原論」、「文学史」から創作の動力を得るといよりは、政治経済史や内外の詩の歴史

の動向などを勉強するほうが、より切実である。」にわか思想的転換にも見える鄭芝溶の態度に対して、ある読者は無記名の投書でこう述べた。「私は、先生の宗教信者としての詩人を尊敬していたのに、どうしてソ連の唯物主義だけが文学になるとおっしゃるんですか」²¹⁾。要するに、カトリック信者としての鄭芝溶が、なぜ「公式主義」的な社会主義に傾倒したかを問うているのである。そして、鄭芝溶自身は、いかなる国の社会科学辞典にも載っていないであろう公式主義という概念の歴史について書く。

詩人は、慣れ親しんだ言語を見慣れないもののように書く人だとよく言われる。しかし、この見慣れない実践は、「異化」というよりは、それ自体「見慣れない言葉」で埋め尽くされている。そのような言葉の使い方を、詩人自らは「解放のおかげで、今はできるかぎり朝鮮人としての役目を果たさなければならないということ」であり、国土と人民に向かって書く「正しい芸術」であるとする²²⁾。新語と文学語の、その奇妙な重なり合いを、ひとつ機能的なレベルで対照させてみよう。

<表一：文学語と新語のバランスシートの一例>

鄭芝溶, 民族解放と「公式主義」	民潮社阪新語辞典	最新現代語辞典
共産主義	共産主義	共産主義
公式主義	公式主義	公式主義
勤労人民層	勤労階級・勤労者層	×
幾何学	×	×
機会均等	機会均等主義	機会均等
南北人民連席会議	×	×
南北統一	×	×
弄文主義者	×	×
マルクス理論	マルクス主義	マルクス主義
無産人民層	無産階級	無産者／無産階級
米ソ共委	米ソ共同委員会	×
民族主義	民族主義	民族主義
民族解放	民族運動（弱小民族解放運動：解題）	民族運動
民族解放運動	民族運動（弱小民族解放運動：解題）	民族運動
民主人民政府	民主主義	民主主義・デモクラシ
反動	反動主義	反動／反動運動
反託	信託統治／託治	信託統治制
附日協力者	親日派	×
附日詐欺師	親日派	×
非暴力抵抗	×	無抵抗主義／ガンディーズム
三相決定	幕府三相会議（解題）	×

ソ連邦	ソビエト／ソビエト制度	ソビエト制度
悪宣伝	悪徳新聞	宣伝
理論闘争	×	理論闘争
朝鮮人民	朝鮮人民共和国	×
資産家	資本家階級	×
自主独立	自主外交	×
朝鮮統一	×	×
左翼小児病	左翼小児病	小児病
地主層	×	
土着資本家	×	資本／資本主義
クレムリン	クレムリン	×
ポーツダム宣言	ポーツダム宣言	ポーツダム宣言
被搾取民族	被圧迫民族解放運動	×
被圧迫民族	被圧迫民族解放運動	×
小市民	小ブルジュア	中間階級

3頁ほどの文章から、おそらく当代の文脈において作られたか、再定義されたはずの36個の主要語彙を抽出し、それらの語彙を当時の新語辞典類の表題および関連語と対照させてみた。多く見積もればおよそ四分の三、少なく見積もっても半分に近い言葉が、いわゆる「新語辞典」を引かなければならないような語彙である。また、民主主義や民族主義、民族解放のような語彙はそれぞれ異なる仕方で定義され、さらには私用・誤用・濫用されていた。それは、鄭芝溶自身も書いているところの名目争い、いかにも「民主主義と民主主義の戦い」であった。もっとも、時事的な文章一つで、一人の詩人の概念世界の変化を断定的に確証することなどできないだろう。ただ、それ以前の鄭芝溶の散文と比べてみても、政治的概念を闘争的に使うようになったことは比較的明確だと言えよう。あるいは、解放期の詩的闘争とは、政治と法をつなごうとする誓いと口号の表現の中に集約されているかもしれない。

単にこの詩人ひとりだけのことではない。それこそ、「概念」争い、「理論」闘争が文学的实践と併進する構造ができあがっていたわけである。文学という織物と政治という構造がともに組み込まれるこの瞬間は、まさに文学語と政治語が中間テキスト化される場面でもあった。

それは、この時期が、いわば英語と社会科学用語の全盛期であり、文学語が限界概念としてしか存在しえない時代であったことを傍証する。「新しい国」をめぐる葛藤が先鋭化していたこの時代は、概念語と文学語が急激に、また必然的に出会うことによってで

き上がった、「新しい言葉」の時代でもあった。新しい国のウリマルという激情的なプログラムが、南北両方で社会的な議題となった。しかしながら、植民地の遺産としての日本語、新植民地的状況の反映としての英語やロシア語との言説的な拮抗にもかかわらず、当時の政治的激動は大量の外来語と政治語を、日常と文学の領域の中に創り出した。

したがって、解放期の韓国語文学の問題を考えるためには、以下に上げるいくつかの要素が作るベクターを熟考しなければならない。ハングルおよび韓国語口語の問題、英語とロシア語、新語、漢字、日本語がそれらの要素である。新語にもまたいくつかの層がある。大きくは抽象語と日常語のレベルがあろうが、大きくは社会主義関連語彙、米文化関連語彙、ロシア語関連語彙、社会団体および組織関連語彙、社会科学および哲学用語、新しい風俗語などが、いわゆる「新語」あるいは「現代語」の範疇に入れられた。

3 新語の時代

—ウリマル、新しい言葉、新語、現代語

3.1. 解放の衝撃と言語的实践の力動性—新語辞典の骨組みと資料的価値

韓国語文学史の観点から解放期を解明しようとする際、何より注目すべき現象の一つが、新語の爆発的な増加である。それを反映した新語辞典がいつになく活発に出版された。それはまず当代の政治と言葉、概念と実践に対する地図であり、現実的には金になる事業であった。新語が急増する現象をそのまま反映した出版の必要とは別に、とりわけ第二次世界大戦を国家主義に対する国際主義の勝利と定義した社会主義系の知識人たちにとって、新しい国際的知識と社会運動の俸業を媒介するための辞書の編纂は、重要な大衆戦術の一部であったのではないかと思われる²³⁾。解放期前後に出版された各種の新語辞典および関連辞典の目録を、できるかぎりの調査範囲でまとめてみると、以下のようになる²⁴⁾。

<表二：解放期前後における「新語辞典」類の目録>

編者および著者	書籍名	出版社	刊行/再版	頁数(頁)	価格 (ウォン)	備考
崔録東	『現代新語積義』	京城：ムンチャン社	1922.12.30.	66		
青年朝鮮社編輯	『新語辞典』	京城：青年朝鮮社	1934.10.	148	?	青年朝鮮十月創刊号別冊付録

編者および著者	書籍名	出版社	刊行／再版	頁数(頁)	価格 (ウオン)	備考
朴勝濟	『新語辞典』	京城：新朝鮮社	1934	?	?	
金允編	『主義解説』	ソウル：社会発 展社	1945.12.	73	10	
池中世著	『最新現代語辞典』	ソウル：新光出 版社	1946.4.15.	243	?	
	『最新現代語辞典』	ソウル：新光出 版社	1948.12.15. 再版	243	500	
	『最新現代語辞典』	ソウル：三文社	1954.2.10. 三版	243	300	
鄭煥根編著	『新語辞典』	ソウル：民潮社	1946.5.	190	35	
韓鏞善著および 発行	『民潮社版新語辞典』	ソウル：崇文社	1947.11.15. 再版	156	180	上と同一書籍の 再版
金允編	『社会用語集説』	ソウル：発展社 出版部	1946.5.20.	105	18	
劉永祐，張桂春	『社会科学辞典：プ ロレタリア辞典』	ソウル：ノノン 社	1947.1.	256	150	
三文社出版部編	『社会問題辞典』	ソウル：三文社	1947.3.	154	100	
文化堂編集部編	『主義と解説』	ソウル：文化堂	1947.8.10.	94	100	
イシチェンコ編 白孝元訳	『哲学辞典』	ソウル：開拓社	1948.7.15.	369	700	題名は「新語辞 典」ではない
李錫台編	『社会科学大辞典』	ソウル：文友印 書館	1948.8.20.	767 (付録 20 頁)	1700	題名は「新語辞 典」ではない
李載堦	『哲学辞典』	ソウル：東国文 化社	1949.6.20. (1952年再版)	489	1500	対照のための文 献
李鐘垣	『新語辞典』	大邱：英雄出版社	1952.1.20.	148 (付録 17 + 40 頁)	?	
崔秉七編	『時事新語辞典： New Handbook for World Topics』	ソウル：弘志社	1952	225	?	
三中堂編輯部編	『時事新語辞典』	ソウル：三中堂	1954 (1955年 再版)	429	?	
大志社編輯部編	『最新世界新語辞典』	ソウル：大志社	1955	287	?	

新語辞典類は、収録語彙のあり方と編纂の目的によって大きく三つに分類することができる。まず、新しい語彙を、風俗、文化、思想を包括して収集し提示する場合、次に、さまざまな「主義」や「イズム」の名前がついた思想的指向性を中心に編纂された場合、さらに、パンフレットの形で論争的な概念を「解説」中心に比較的仔細に提示する場合がある。思想的指向性を持つ語彙は翻訳を経て漢字として土着化されたものが比較的に多かったのに対し、新文物や風俗にかかわる語彙の中には外来語が多いのが特徴である。(それらの外来語は、すでに1930年代中頃には新たに「モダン語」として扱われ、別途の辞典も刊行されている。) 新語辞典の最初の出版は、崔録東(チェ・ロクドン)の『現

代新語積義』が出た1922年に遡るが、新語を整理した語彙集と辞典類がこれだけ短期間に、またこれほど多量に出版された例はかつてなかった。

崔録東の『現代新語積義』（1922年）と青年朝鮮社が編集した『新語辞典』には、重なる語彙もかなりあるが、解題の仕方などにおいては、間テキスト性や相続と見なすほどの、明らかに参照した痕跡は見当たらない。一方、民潮社が刊行した『新語辞典』（1946年5月）と青年朝鮮社が編集した『新語辞典』（1934年10月）の間には、明白な相続関係が存在する。民潮社版の『新語辞典』は、青年朝鮮社編『新語辞典』に収録された667個の語彙のうち、解放期の新語のあり方に符合しない46個を除外し、それらをすべて表題と解題のレベルで載せ、さらに583個の表題項目と解題を新たに付け加えて出版したものである²⁵⁾。新語という言葉の定義上、半分に当たるそれらの語彙こそが解放期に創り出された言葉であるはずだが、それ以前に出版された辞典から語彙を持ってきたところを見るかぎり、『新語辞典』（1946年）に収録された語彙は依然として「新しかった」とも言える。1945年から1947年に渡っては、ほとんどの辞典が同じような時期に出されたため相互参照は難しかったと思われるが、重なる語彙は著しく多い。

民潮社版『新語辞典』の特徴と言えは、何より解放期に結成された各種団体合わせて210個分の住所、代表者、組織、内容および目的などを、「団体内容概説」という別の章でまとめて記述している点である。ある調査によれば、この民潮社版『新語辞典』の1250個の語彙はすべて借用語であり、漢字語と漢字句が60%、外来語（句）が35%、混種語彙が5%程度であるとされる。外来語の相当数は、すでに1930年代から使われはじめた、いわゆる「モダン語」であったが、米軍政と赤軍の進駐により生まれた言葉も多かった。日常語彙は577個（46%）、専門用語は673個（54%）と分類されたが、その割合は社会、経済、法律、政治、歴史、哲学、文学の順である。固有語や流行語は除外された。新語のおよそ767個（61%）程度が、新しい概念、理念、主義、法などにかかわる抽象語であり、新しい職業と階層、活動にかかわる新語が133個（11%）、新しい事物にかかわる新語が131個（10%）、新しい国家、団体、機構が83個（7%）、新しい場所や知っておくべき歴史的な場所にかかわる新語が53個（4%）、外来語で表現された状態や形状、挨拶が31個（2%）、歴史的な事件が15個、新しい記念日が九個などである。1250個の新語の中、およそ350個の語彙が、その当時に新語として使われただけで、後の国語辞典からは抜けることになった²⁶⁾。

池中世（チ・ジュンセ）の『最新現代語辞典』（1946年4月）は、政治経済、風俗文化、理念および学術関連語彙およそ2400個を取り上げた辞典で、新語辞典類の中ではその範

困が広範なほうである。民潮社版『新語辞典』と『最新現代語辞典』はほぼ同じ時期に出版され、相互参照が行われたと見なすのは難しいが、語彙選択においてかなり重なる一方、解題の内容においては概ね異なる。同様に、ほとんど同じ時期に出た金允（キム・ユン）編著の『社会用語解説』（1946年5月20日）は、主に社会主義関連の用語および事件、組織に集中し、一、二頁分量のより詳しい解説を加えたパンフレット型の辞典であるという点で、当時の新語辞典類の「目的」を垣間見させくれる。ちなみに、『社会用語解説』の表題をすべて上げれば、以下の通りである。

高麗共産党運動、共産主義、国際赤労支部運動、工場委員会、京城学生ヤチューカ活動、謹友会、関西民衆運動、間接選挙、階級、階級闘争、階級国家、光州学生闘争、農民組合、デモクラシ、労働組合運動、メーデー、民族主義、民主主義、反動、普通選挙、ブルジョアジー、弁証法、封建制度、社会運動、十二月テーゼ、産業党事件、三民主義、産業革命、新幹会運動、新義州工場労組運動、一進会、永興農民組合運動、ML運動、ML朝共運動、原始共産制、止揚、資本主義、左翼小児病、全南労農組合運動、赤色・白色・黒色、朝鮮共産運動、朝鮮民族運動、済州島共産運動、帝国主義、搾取、コミユニゼ、テロ、ファッショ、プロレタリア、平壤労組運動、咸興自由労組運動、革命、解放、洪原農民組合運動、協同組合²⁷⁾

わずか一年三ヶ月後に出版された、似たような種類のパンフレット型新語辞典として、文化堂編輯部が編纂した『主義と解説』（1946年5月20日）を見れば、その間に起きた急激な概念分化の過程をはっきりと感じ取ることができる。そこには、深化した認識と分化した理念、戦略的批判の語彙が付け足されているのである。その付け足しの過程は、闘争概念としての性格が強くなった、マルクス主義関連の語彙に集中している。

階級、階級闘争、改良主義、科学的社会主義、共産主義、共産党、共産党宣言、基督教社会主義、ギルド社会主義、金融資本主義、空想的社会主義、古典主義、経済民主主義、講壇社会主義、国民社会主義、個人主義、国家資本主義、国家社会主義、恐怖主義、急進主義、農業社会主義、ダグラス主義、ダダイズム、ディレッタンティズム、独裁政治、独占資本主義、レーニン主義、ロシア革命、浪漫主義、民主主義、文芸復興、マキアヴェリズム、マルクス主義、マルサス主義、未来派、無政府共産主義、メーデー、メンシェビキ、メンデル主義、モンロー主義、無政府主義、反宗

教主義、反動主義、白系露人、バーターシステム、ブルジョア、ブロック経済、ブレイントラスト、弁証法、法的社会主義、ボルシェビズム、世界主義、写実主義、実用主義、産業革命、産業民主主義、産業予備軍、サンディカリズム、三民主義、社会改良主義、社会科学、社会主義、社会政策、社会民主主義、修正派社会主義、上部構造、新興芸術派、象徴主義、新マルサス主義、スパルタクス団、C.G.T.、C.G.T.U.、ソビエト、議会主義、芸術至上主義、芸術的社会主義、認識論、人道主義、悪魔主義、一元的国家論、一元論、イデオロギ、印象主義、インターナショナリズム、インターナショナル、組合主義、集産主義、第三帝国、第四帝国、帝国主義、重商主義、左傾・右傾、左翼小児病、自然主義、ジプシー、資本主義、資本論、資本主義第三期、自由主義、重農主義、宗派主義、進化論、正統派マルクス主義、シオニズム、超現実主義、コロンタイズム、テクノクラシ、統制経済、表現派、ファシズム、フェミニズム、フォーヴィズム、プロテストантиズム、プロレタリア、プロレタリア独裁、黄色インターナショナル、虚無主義、ヘドニズム²⁸⁾

単に「社会主義」を提示するだけでなく、その理念的差異にかかわる限定的修飾語を通じて、それらを理念的・組織的レベルで細分化している。たとえば、『主義と解説』で社会主義が入った表題は、14～5個（社会民主主義を含む）に及ぶ。つまり、闘争的概念の枠組みの中に、三つの層の概念があるのだ。運動の中で統合的に進化・分化する概念群があれば、その内部で弁証法的な止揚の過程を経て克服されなければならない「内的限界を有する諸概念」もある。マルクス主義、社会主義、共産主義内部の敵は、「基督教社会主義、空想的社会主義、急進主義、講壇社会主義、国民社会主義、国家社会主義、サンディカリズム、修正派社会主義、左翼小児病、宗派主義」などである。さらに、徹底的な敵対の対象となる非対称的な対応概念が提示される。たとえば、「金融資本主義、古典主義、個人主義、国家資本主義、恐怖主義、虚無主義、ダダイスム、ディレッタンティズム、独裁政治、独占資本主義、浪漫主義、マキアヴェリズム、マルサス主義、未来派、社会改良主義、新マルサス主義、議会主義、芸術至上主義、人道主義、印象主義、右翼、資本主義、ファシズム、虚無主義」などの項目である。

重要なのは、それらの新語が、多くの場合、出版社の主導で発行されるだけの「商業性」を有していただけでなく、「日常的」な必要すなわち言語生活上の要求によって創り出されたということである。以下に上げる二つの序文を見てみよう。

日進月歩する現代文化と世の中は、これを表す新時代の言葉を雨後の筍のように簇出させている。吾人が現代人として現代に処するうえ、現代の世の中を正確に捉え、また物事の推移を洞察し、新しい思想・新しい知識を得るには、まずその時代の言葉を理解しなければならないはずだ。本書は、昨今の社会で日夜使われ、また誰もが常識的に知っておくべき言葉を集め、簡明かつ公正な解析をつけたものである²⁹⁾。

もとより、われわれ人類に対する辞典の貢献は、教科書の学生に対する使命と同様、認知を啓発し、品性の陶冶かつ向上の指針を活かすことにある。従来の辞典は、法律であれば法律、文学であれば文学に対する専門的知識に限られ、よって日本語辞典に一任されていた。それに対し、この辞典は、法律・経済・文学・新語等を総合・収録したこと、またわれわれの国語辞典として編纂されたことがその特色である。長きに渡る屈辱と圧迫、搾取の日々は終わり、自由と解放の華麗なる日々が訪れた。ここに、吾人は、数十年前の学生時代に研究し収集したものをまとめ、わが解放を記念すると同時に、時代の要求、大衆の便宜をはかろうとする意図の下、極めて理想的な編纂方法で心残りがないようにした。実際の生活と極めて交渉の多い現代語に力を注いだのは無論のこと、新聞・雑誌・交際における談話の資料として編纂した³⁰⁾。

したがって、この新語辞典が提示する数々の表題は、「日夜使用」され「実際の生活と極めて交渉の多い」新時代語・現代語の要目であったわけである。そこから、昼夜の生活を取り扱う文学に、そのような語彙が直接的な役割を果たしていたと仮定することができる。

3.2. 新語の社会科学化と日常化—日常化された概念と概念の日常化

理念闘争と事件が結びつく過程で、新語辞典は社会科学化されると同時に日常化される。新語の社会科学化現象は、李錫台（イ・ソクテ）が三七人の専門学者と一八人の補助執筆者たちの力を借りて編纂した『社会科学大辞典』（1948年8月20日）において集大成される。李錫台は、その編纂目的について、専門家のためではなく、日常語彙のレベルで必ず必要となるような事情があるためだという点を明らかにしている。要するに、社会科学辞典そのものが当代の必須の教養であり、街頭と職場、学園などでの実践に必ず必要とされる、日常の道具であるという認識が明確に込められている。

「[この辞典の刊行は：引用者] われわれが、何かの知識欲から、または超絶な理論家になりたいといったインテリゲンチヤ的根性からではなく、街頭で、職場で、学園で、実践的な運動をする者であれば誰でも共通して感じる貴重な体験に基づく要求による。……しからば、本辞典は何を目標として編集されたのか。われわれは、現下の朝鮮の民主主義建国運動者が最も切実に感じる、政治、経済、世界一般の社会運動史、哲学、偉大なる各国の先人たちの紹介、朝鮮社会運動の一般問題などを広範囲に網羅し、朝鮮の民主主義建国運動者に実践理論と体験知識を提供し、これからわが朝鮮の民主主義運動に投身する後人たちに、一つの参考資料を与えんとすることに、その主眼を置いている。……ならば、外国の辞典の中に最も権威あるものは何であるか。それは、未だわれわれの記憶に残っており印象深いのは、日本の経済学辞典、社会科学大辞典（以上、改造社修正増補版）と、唯物論辞典（ソ同盟の哲学者、ミーチン、イシチェンコ両氏共著の1939年白揚社版）、ソビエト百科辞典（ロシア問題研究所編）などと言えよう。しかしながら、それらの辞典の中には、また誤謬も少なくないだけでなく、時代に遅れたもの、不必要なものや錯誤も多いため、われわれはわれわれの理論武装に必要なものだけを材料にし、残りは27人の執筆者たちが創作した後（原稿用紙8500枚のうち約4500枚を創作）、内容の充実を期するため権威者13人に監修を求めた。よって、本辞典の内容を正確に言えば、半翻訳半創作となる。……執筆者たちの大多数は一人でいくつもの役をこなし東奔西走する建国志士たちであるゆえ、原稿一枚をろくに書く時間がないだけでなく、中でも筆舌に尽くしがたいあらゆる迫害の中にも本辞典のために玉稿をくださった各位、監修していただいた各位に、熱い感謝の言葉を贈る旨である³¹⁾。

上記の引用文から、以下の情報を読み取ることができる。第一に、この辞典は、街頭と職場、また学園の実践運動に役立つべきであるといった要求から作られた。「実践理論」や「体験知識」などの表現が示しているように、この時代では理論と知識が実践と体験に結びついていた。第二に、この辞典は、日本の同類の辞典と（日本に訳された）ソ連の唯物論・百科辞典を参照にして作られたもので、半翻訳半創作である。第三に、執筆者たちは迫害されている建国志士たちであり理論家たちであるが、そのため辞典の目的は建国の主体である大衆に実践理論と体験知識を提供することにある。実際、著者の記録によれば、白南雲（ペク・ナムウン）、李哲（イ・チョル）、李北満（イ・ブクマン）、印貞植（イン・ジョンシク）、全錫淡（チョン・ソクダム）などが執筆にかかわったとき

れている。筆者の調査によれば、相当数の表題項目と解題が改造社版の社会科学辞典から来ているようだが、日本についての叙述を消したところに朝鮮の経験を挿入するような形がしばしば見られる。いわゆる「唯物論辞典」形式の辞典は、この辞典より一ヶ月早い1948年7月に白孝元（ペク・ヒョウォン）によって『哲学辞典』（イシチェンコ）という題名で訳されている。同時多発的な必要が存在したわけだが、白孝元もまた、訳者まえがきで「今日、われわれが唯物論の見地に立脚して弁証法的唯物論を主張するのは、それだけが人類の認識の歴史の要約であると同時に結論として、その全成果を自らの深奥な内容とする哲学であり、唯一そこにおいてだけ、最高の科学的照明の下ですべての問題がその本質とともにその解決方向まで提示されうるためである。したがって、われわれの哲学辞典は従来の哲学辞典とその編修方法を一緒にするわけにはいかない」と書いている³²⁾。政治的状況は「酷く不自由な状態」に入りつつあったが、言語の社会科学化および社会科学的言語は、韓国の言説空間において日常的なものとして一般化していった。「オーチェンスパシーバ、サンキュウーベリーマツチ」の時代は、風俗と理念が同時にやってくる時代であった。解放期は、その意味で、コゼレックが言ったような「鞍の時代（Sattelzeit）」だった。ただし、その鞍の手綱は、上記の二つの挨拶を母語として使う者たちの手の内にあったにせよ。

新語辞典の多岐にわたる出版は、およそ国際主義的指向、国内政治の組織と傾向に対する関心、二十世紀の主な思想傾向に対する地図作成（mapping）、新しい風俗と日常の変化への関心などにより主導されていた。まず、新たに要求される知識の量が増えたが、その知識は国際的政治および思想の動向を反映したり、国内の政治的激動を収斂する形を取ることが多かった。共産主義系列の国際主義的情勢論や国内政治への介入意志が主な動因になるなか、日常生活および風俗にかかわり新しく向き合うことになった米国（一部、ソ連）文化が、新語発生の一つの動員となっていた。民族主義勢力もまた、国内における基盤と関連知識が少なかった分、それらの辞典は海外の独立運動および社会運動の傾向と組織をまとめて提示しようとした。朝鮮共産党の第二次世界大戦に対する認識が国際主義のよる国民主義の克服にあり、民族勢力もまた列強による主要な決定の従属変数にならざるをえない状況において、それら新語辞典や社会科学関連辞典は、諸勢力間の対立の根本的原因を思想的指向と国際情勢の中で判断するのに、少なからず役立ったであろうと判断される。今後展開される国内情勢もまた米国とソ連を中心とした国際的交渉に大きく左右されるしかないという判断が支配的だった状況の中、各種の条約と宣言、社会主義運動のさまざまな傾向、米国式民主主義の性格にかかわる項目が、それ

らの辞典の一角を占めたのは、一見当然だとも言えよう。それら辞典そのものが国内外の諸政治勢力のプロパガンダを理解するためのマニュアルであり、まさにプロパガンダの方法としても機能したのではないだろうか。政治熱により日常化された、それらの新しい、あるいは復活した概念は、このような辞典やパンフレットを通じて、新聞や雑誌メディアを補いつつ、概念の日常化という現象を生み出していったと思われる。

その時代を互恵的に扱うことができた閃きの瞬間（1960年4・19革命直後）が訪れた際、崔仁勳（チェ・インフン）は自らの小説『広場』に、当時の「新語」現象についての意味深長な叙述を書き込んだ³³⁾。

ミョンジュンが使ってきた言語たちの内包はすべて修正されなければならなかった。新しい言語を作り出す人たち、しかしそれが問題なのではなかった。ダダイストやオートマティストの一端が新しい言語を創造しようという陰謀を立てたのが正当な努力であったならば、新しい条件で人間を指導しようとする人たちがそれに適合した新しい言語を作るといえども、ミョンジュンとしては強いて不満に思うことなどなかった。問題は、作られた言語の質だった。ダダイストたちが失敗したみたいに、コミュニストたちも失敗したのだった。ダダイストが極度に個人的な言語を作ることを目的としたとすれば、コミュニストたちは完全な集団の言語を作ろうとした。彼らの言語には、ニュアンスもなく、逆説もなかった。言語のデジタル化³⁴⁾。

つまり、イ・ミョンジュンはダダイストの新語とコミュニストの新語のあいだに立っていたわけである。北に行って記者になったイ・ミョンジュンは、「党」の新しい言語と、家に帰ると聞くことになる同じ年頃の継母の艶やかで「古めかしい」平安道なまりのあいだで違和感を感じながら、「一体、どこに革命があるというのだ」と問う。ところが、その一連の表現は、著者の度重なる改作過程を通じて、以下のように変化する。「同じ内容」を述べるくんだりを照らし合わせてみれば、概念的な新語の状況、新しい文学の言葉への意欲が、相変わらず韓国の現在のな主題であらざるをえなかったことが見えてくる。

ミョンジュンが使ってきた言葉の意味が、すべて改められなければならなかった。セマル（新しい言葉）を作り出す人たち。しかし、本当はそれが悪いわけではなかった。ダダイストやオートマティストの群れが新たな言葉を作ろうと企んだのがしかるべき努力であったならば、新しい下地で人を導かんとする人たちが、それに相応

しいセマルを作るといえども、あえて責めたくはなかった。悪いのは、作られた言葉のできである。ダダイストたちが誤ったように、コミュニストたちも誤ったのだ。ダダイストが愚痴のような独り言を作ることに狙いがあったとすれば、コミュニストたちはすっかり群れの言葉を作ろうとした。彼らの言葉には、色の変わりもなく、匂いもなかった³⁵⁾。

言語のデジタル化としてまとめられた北の言語と、米国式の風俗の下で変化しつつあった南の言語。イ・ミョンジュンの彷徨いを言語的に要約すれば、「スターリニズム (一) 原始共産社会 (二) 私有財産制度の発生 (三) 階級社会の中の人類 (四) 奴隷・封建・資本主義社会の歴史 (五) カール・マルクスの登場 (六) 釜と金槌 (七) 自我批判制度 (八) スターリン (九) クレムリン宮 (一〇) 文明共産社会³⁶⁾ といった言葉の連鎖と、「ダンスパーティー、ドライブ、ピクニック、映画、またダンスパーティー」³⁷⁾ という言葉の連鎖との葛藤として要約することができよう。分断は、すでに「オーチェンスパシーバ、サンキューベリーマッチというロシア語だよ」³⁸⁾ という翻訳のどこかに待ち伏せていたわけである。

興味深いのは、線を引いた、最初に発表された原作から変更された部分である。78個の語のうち41個の語が変更されており、著者は改作を繰り返しながら、「漢字語をすべて非漢字語に変える」ことに力を注いだ。「われわれの小説の文は漢字語をハングルで表記するために、芸術としての言語表現の本質である意識と現実の葛藤という過程を、すでに作られている漢字語に押し付けておきながらそれと気付かなくなる、表記から来る罫を隠して」³⁹⁾ いるためだと言うのだ。興味深いのは、ここで新しい言語すなわち新語をすべて「セマル (新しい言葉)」に変えたわけだが、その変更こそが韓国現代の「小説の文」あるいは「文学語」が分岐してきた歴史と一致するという点である。

ところが、それらの新語は、人民大衆の活用によりはじめて「セマル」として定着した。詩人の金起林 (キム・キリム) の立論を紹介しながら、結びに入りたい。

4 ウリマル時代の「新しい言葉」

— 金起林の『文章論新講』、「天才的大衆」あるいは固有性の源泉

金起林の「新しい言葉作り」(1949年)は、漢字や外来語だけが新語を作り、また新しい文化を創造するというふうに見える「現代的」幻想を批判するために書かれたもので

ある。そこで金起林は、米軍政期に生まれた数多の新語を鳥瞰しながら、韓国近代語の生成原理にかかわる一般的な立論を覆す、非常に挑発的な言明をする。すなわち、新語の問題に対するわれわれの考え方は間違っていたというのだ。彼は言う。「ソウル」は、「漢陽」と「京城」のどちらよりも良い言葉として、よく復活した。そして、その復活は、二重の言語世界を一気に大衆化する、巷の人民たちの勝利として意味付けられる。彼は「ライター」のような新風俗の外来語ではなく、「ライター石」という、巷のとある天才が作った合成語の力に注目する。

金起林が掲げた「新しい言葉」の目録で核心をなすのは、まさにこの「ウリマルと在来の漢字語をくっつけて」、また「ウリマルと外来語」をくっつけて新しい言葉を作る、「大衆の天才的な方法」⁴⁰⁾であるというのだ。漢字語でも外来語でもなく、「まなびのいえ、とびもの」などでもない、「謀利輩, 새치기, 그림葉書, 無識쟁이, 洋갈보, 洋담배, 洋鉄, 限量ない, 桶조림, 올바른 (順に, 不当利得者, 割り込み, 絵葉書, 無学な者, パンパン, 外国産タバコ, ブリキ, 計り知れない, 缶詰, 正しいの意味:訳者)」のように、外来性と期待を土着化するハイブリッドな言語こそが解放期の「新しい言葉」の核心であるとのことである。舶来品愛好家の新語や外来語ではない。求められる新しい国の新しい言葉、新しい文と新しい修辞学は、理念の浪費によっても、純粹主義者の節約によってももたらされない。

純粹主義が作る新しい言葉が、「ドン・キホーテ」の蛮勇にすぎないとすれば、新しい言葉は一体誰が作るのだろう。それは民衆なのだ。……大衆は、実は新しい言葉を作るにあたって、下手な純粹主義者たちより全く天才的なのだ。嘘だと思えば、八・一五以降に出てきた新しい言葉だけでも見てみるがいい。前に上げた混成語だけでも見直してみるがいい。大衆はまた、新しい言葉を作ることに於いて、決して無駄なことをしない。…場合と必要によっては、人の言葉もむやみに持つてくる。言葉は、だから純粹主義のような古めかしい国粹主義とは合わない、闊達な「コスモポリタン」である。言葉の世界で独裁を画策しているは大変な目に合いかねない。言葉において、民衆は徹底的に自由主義者なのだ⁴¹⁾。

たとえば、金起林は軍政文教部の国語審査委員会とその核心人物であった固有語主義者の崔鉉培（チュ・ヒョンベ）を徹底して批判する。「軍政文教部編修局の首脳であり漢字廃止論の総隊長格である崔鉉培氏が背負っている軍政と朝鮮語学会という二重の後

光」⁴²⁾に圧倒されてはならないのだ。人為的に遡及された固有語そのものが一種のこじつけ翻訳にすぎず、固有性とは内外の諸環境に対応する天才的大衆の言語行為そのものにあるというわけである。歴史を飛び越えた固有性や、場所と無関係な普遍性があるのではなく、固有性とコスモポリスの関係を支配する一般知性の運動があるだけだというのが、金起林の考えだった。したがって、新語や先導概念についてもまた、まさにこの民衆あるいは大衆の潜在性によって、その期待の地平が開いたり閉じたりすると言うことができる。問うべきは、起源や語源のことではなくその使い方であり、実在にかかわる唯一の言語政治学は、固有のコスモポリタニズム (vernacular cosmopolitanism) にかかわるものであるか、コスモポリタンの固有主義 (cosmopolitan vernacularism) であるしかない。ここで固有性とは、外部と内部の諸力が織りなす「今この場」の生-生命、あるいはその時間、その場所を占有して生きていく大衆の力量に他ならない。

金起林にとって、概念あるいは言語的戦いの勝敗は、イズムと天才的大衆の結合にかかっていた。漢字の廃止やハングル化、外来語の導入や日本語の追放などは「言語-政治」の問題において決して核心的なものではなかった。金起林はなぜ、新語ではなく「新しい言葉」を見よと言ったのか。それでもなお、解放期の彼の詩の中には、なぜそれほど多くの概念語や新語が出てくるのか。問題は、一般知性だけが保障する経験の空間と、期待の地平との結びつきだったのだ。彼はそのような諸概念語が、天才的大衆あるいは民衆たちの発話内行為や媒介行為によって、まるで「ライター石」に火がつくように点火することを望んだのではなかろうか。

「ウリマル」の現在と未来にかかわる諸見解の行き違いとともに、もう一つ付け加えなければならない問題に言及しつつ、この節を結ぼうと思う。果たして「ウリマル」とは、当代においていかなる含意と指向を持っていたかという問題がそれである。「ウリ (われわれ)」が持っており、持たなければならない「マル (言葉)」としてのウリマルは、言うまでもなく自明の価値でもなければ崇高な実在でもない。「ウリマル」の当代的な語用は多くの場合、回復された言葉、あるいはさらに回復していかなければならない言葉、新しい共同体に相応しい言葉、よその言葉ではなく自らの肉体に刻まれた言葉、大衆/民衆の言語といった含意を持っていたと思われる。しかし、その「ウリマル」は、世代と地域によっては、新しく回復された言葉ではなく新たに学ばなければならない言葉、新しい政治共同体により強要される言葉であったかもしれない⁴³⁾。言い換えれば、すべての共同体論がそうであるように、ここでの「ウリ」は自明ではなく、したがって「ウリマル」自体も決して自明なものではなかったのだ。あるいは、解放期とは、少数者

や他なる存在の問題を考慮に入れることができない、「ウリ」という民族共同体に対する強迫と、ヘゲモニーの在処を占有しようとする多数性への執着が支配していた時代なのかもしれない。民族、共同体と、それにかかわる指標以外の要素を消していく過程は、それ自体として別途に検討する必要があるだろう。また、純粹主義と大衆主義のあいだに存在する「自然」としての「ウリマル」という漠然とした対象に介入するさまざまな作為についても、より慎重な検討を要するだろう。

5 約束の時代から（再び）朝鮮学時代へ

—「法・イズム・誓い・口号」から粹、慇懃と根気へ

英語、新語、新しい言葉。三つの「新しい言語」が解放空間を分割している中、日本語は依然として媒介の力を失わずにいた。その言語的力が作り出すベクターによって、概念と日常、期待の地平と経験空間の間隙が、分節の形としてではなく、「結合」への要求として現れたのが解放期である。

法と制度の言語として、米軍政（MG）を頂点として波状に散らばっていく英語とその翻訳は、植民地から後期植民地＝新植民地に続く通訳体系による支配として要約することができる。その支配に対する応答である、「グッド・モーニング」または「オーチェンスパシーバ、サンキュウーベリーマツチ」という挨拶の言葉が、その後続効果によって大量に出回った。それらの言葉が新語世界の一つの軸をなしている。ここで、法の形式は風俗の形式として世俗化される。

次に、新語空間の七割を掌握したいわゆる「イズム」の言語は、ある種の誓いの言葉として、法の領域とは衝突する言語空間を生成した。いわば「歴史における政治的約束の基礎」をなすこのイズムの語彙は、ある種のコミュニケーション、すなわち「誓いによって結ばれた結社」⁴⁴⁾たちを作り出した。解放期とは、親日と附日協力といった過去（処理）の約束と、さまざまな主義が内包する未来の行動（指針）が結びつく「誓い」の世界とも言える。社会主義、共産主義、民主主義のような誓いの語彙は、当代のさまざまな「われわれ」たちの結社体から始はじまり、彼らを「一つに束ねる力」になると同時に、期待の地平の競い合いによる内戦的状况を演出した。その誓いの言葉は、口号すなわち生きた声を通じて再び演出され、そこで誓いと口号は革命的な状況の下で結び合わされた。

さらに、「ウリマル」に対する戦略と確信が、上述した二つの言語すなわち法と誓いの言語を戦略的に横断しながら、それぞれの言語の陣地に身を据えた。民族と社会、民主

主義、社会主義のすべてが、この「ウリマル」という空白の価値を、それぞれの仕方で埋めていった。「ウリマル」というシニフィアンのシニフィエは、したがって上記の二つの言語の内戦によって決定され、結果的には両者のどちらにも散布された。「ウリマル」に対するこの信念は、一見すると英語、ロシア語と敵対するようにも見えるが、必ずしもそうではない。韓国では米国で四〇年間暮らした李承晩が、北朝鮮では中国共産党の人民議員でありソ連赤軍の大尉であった金日成が指導者の座についた。ひとは英語に通じており、もうひとは通訳なしでスターリンや毛沢東と会話することができた。そして、ふたりともハンゲル専用論を主張していた。特徴的なのは、上記の二つの言語が、漢字語と外来語という典型的な「新語」、「概念語」の形で提示されたのに対し、「ウリマル」の問題と結びついた新語の問題は、「新しい言葉」や「新しい国」といった言説と結合しながら、「民衆」、「天才的大衆」という主体を再構成したということである。大衆の生き方と可能性を見出そうとした人たちは、概念語と新語の問題をもはや外来的なものではなく、自生的な期待の地平に対する信頼として刻み込むことになる。「ウリマル」というシニフィアンをめぐる闘争を、金起林が「文法と文学の戦い」としてまとめたことは意味深い。「一方は言葉の憲法を作ることにとりかかったのに、もう一方は現実の行きて動く言葉に充実であろうとした」⁴⁵⁾のだ。

概念が闘争を生み、闘争概念が現実を動かしていた時代。口から出る叫びである口号がもはや概念と分離されなかった時代。(崔仁勳が言ったのとは逆の意味で) 誓うことが依然として意志と行為と倫理を持っていた時代。約束の時代の終焉、否、ただ一つの約束だけが許される時間が到来したとき、はじめて大韓民国という国体はその姿を現す。概念が日常化した時代、日常が概念で詰まった時代は、「アカ」という恐ろしい大他者の登場とともに閉塞されていく。そして、そのような言語の経験は、運動家たちの「地下の言語」あるいはバルチザンの「山河の言語」の中に退却していき、一種の潜在性として底流するようになる。彼らにとって、大日本帝国と大韓民国は、大して異なる国でもなかった。学徒兵を拒否した者はバルチザンになり、しばし地上に現れ出た言語は、地に埋められた文書、証言、山河を書く文学語の中でかろうじて存在するようになる。

廉想涉(ヨム・サンソプ)は解放期に書いた唯一の長編小説『暁風』で、北と南両方に挫折し、モスクワとワシントンに失望したひとりの青年の情動が、結局、朝鮮学に導かれていく過程を、英語の会話に満ちている「物語」を通じて描ききったことがある。主な登場人物たちはみな英語をしゃべり、軍人ではない一般の米国人たちが主要人物に名を連ねているこの小説を、新しい言葉の概念史の中に位置づけてみると、いくつか興味

深い点を見出すことができる。なぜなら、「ウリマル」と「セマル（新しい言葉）」という、それぞれ過去と未来を媒介として競い合っていた二つの地平が、小説の大団円でいわゆる「朝鮮学」の問題に戻ってってしまうのだ。南と北両方に挫折した主人公パク・ビョンジクと、英語と留学を拒絶したヘランが結ばれて、最終的に向かう先にある「イズム」としての愛国主義は、「朝鮮学だけでも人生が足りな」という結論に落ち着いていく。左右、そしてイズムと新しい言葉が除去されたところに、あるいはそれらの中間領域に、いわゆる「朝鮮学」の居場所がもう一度確保される。転向時代の後、1930年代中頃の時代閉塞の現象が、再び繰り返される瞬間であったのだ。この歴史の反復は、しかし相変わらず悲劇である。

そのような意味で、韓国人の精神構造と指向をめぐって、趙潤濟（チョ・ユンジエ）と李熙昇（イ・ヒスン）の間で行われた「粹」論争、つまり韓国人の本質が慇懃と根気か、それとも粹かをめぐる論争の最終審級は、「生かして書いたウリマル」に落ち着くしかなかった。それは概念であるが、実際のところ、いかなる行為も効果も生み出せない「歴史なき」言葉である。その固有性は、モダニティへの経験をほとんど含んでいないだけでなく、文化本質論に近い形だった。韓国文化の本質を慇懃と根気と見なすか、それとも粹と見なすかをめぐる二人の論争は、外国語と「外国」文化の狭間で、韓国語と韓国文化のアイデンティティを再発明する過程を示しているかぎりにおいて、韓国近代概念史の研究で極めて特徴的な一つの節目を構成することができるかもしれない。むしろ、言語の世界と学問の世界を同一の審級において比較するのは難しい。しかし、『曉風』の大団円が象徴するところの、政治から学問への移行、いわゆる朝鮮学を取り巻く諸言語による言説的ヘゲモニーの再取得は、それ自体すでに「法、イズム、誓い、口号」の時代の終焉を内包している。あそこ一生への変化の可能性は、再度こ一生の恒久性に、立ち替わっていた。

「イズム」と一般知性の可能性をすべて取り除くことで可能になった「概念」の領域が、「ウリマル」概念でしかなかったということは何かを物語っている。そして、遠からず、「われわれ式の、韓国式の、固有の」といった形容詞的限定を付け足すことで、すべての「イズム」の内包を蒸発させるような時代が、時差を置いて南北両方に訪れることになるだろう。誓いが消えた時代、政治的約束が「嘘」を制御するいかなる装置も持たない時代における概念の運命にして、これほど象徴的な事例もそう多くはないだろう。

注

* 本論文は、2013年10月26日、同志社大学人文科学研究所が主催した国際学術シンポジウム〈植民地主義のなかの帝国〉において発表した文章を加筆・修正したものである。

- 1) 송남현, 『해방 3년사 I』, 까치, 1985, pp.97-98. それ以前に三八度線分割占領を布告した「一般命令第一号」については 김학준, 「분단의 배경과 고정화 과정」, 송건호 외, 『해방전후사의 인식』, 한길사, 1979.
- 2) 브루스 커밍스, 『브루스 커밍스의 한국현대사』, 김동노·이교선·이진준·한기욱, 창비, 2001, p.267 (=ブルース・カミングス 『現代朝鮮の歴史』 横田安司・小林知子訳, 明石書店, 2003年。)
- 3) 브루스 커밍스, 『한국전쟁의 기원』, 김자동 옮김, 일월서각, 1986, p179. (=ブルース・カミング스 『朝鮮戦争の起源』 明石書店, 2012年。)
- 4) たとえば, 自治委員会に和信百貨店を奪われた朴興植は米軍政を訪ね, ふたりの日本人通訳を連れて行った米軍は委員長長の文錫泰を逮捕した。
- 5) 旧朝鮮総督府の警察二万人のうち一万二千人の日本人が帰っていったにもかかわらず, すでに一九四六年の時点には南だけでも警察は二万五千人に増えていた。数字だけでも二倍以上の増加を見せていたが, その核心は総督府の朝鮮人警察たちであった。警察幹部の80%以上が, 日本人上官に仕えてきた者たちだった。ホッジと彼の顧問たちは, 警察組織を韓国でただ一つの結集された, 信頼できる力の道具と見なしていた。브루스 커밍스, 上掲書, p.221. 肥大化した植民地戦時体制機構の相続を通じた中央集権化については, 안진, 『미군정과 한국의 민주주의』, 한울아카데미, 2005の第三章を参照のこと。
- 6) 이완범, 「해방직후 국내정치세력과 미국의 관계」, 박지향·김철·김일영·이영훈 외 편, 『해방 전후사의 재인식』, 책세상, 2006.
- 7) 안진, 『미군정과 한국의 민주주의』, 한울아카데미, 2005, pp.164-165.
- 8) William Langdon, 1945年11月26日に米國務省に当たった書信 (FRUS[1945], 6:1, 135). 브루스 커밍스, 上掲書, p.205から再引用。カミングスはこの陳述はごまかしであると見なす。左翼指導者の中にも英語ができる者がいたということに自覚していたにもかかわらず, 占領当局の採用スタイルは少しも変わらなかったというのだ。
- 9) HUSAFIK, 第二卷第二章, pp.136-137. (United States Armed Forces in Korea, "History of the United States Armed Forces in Korea", Compiled under the supervision of Hardold Larsen, chief historian, Tokyo and Seoul, 1947, 1948. Manuscript in the Office of the Chief of Military History, Wasington, D.C.) 브루스 커밍스, 위 책, p.254から再引用。
- 10) 브루스 커밍스, 『브루스 커밍스의 한국현대사』, 김동노·이교선·이진준·한기욱, 창비, 2001, p.280. 当惑したホッジは, 日本の退却を悲しみ, 最後まで日本を守ろうとするという意味での「親日派 = Pro-japanese」は韓国内には存在しないと宣言した。
- 11) 鄭煥根編, 『新語辞典』, 民潮社, 1946.5., pp.125-126.
- 12) 안진, 上掲書, pp.114-116

- 13) 서중석, 「한국 현대 민족운동 연구: 해방후 민족국가 건설운동과 통일전선」, 역사비평사, 1991, pp. 229-230.
- 14) 엄상섭, 「재회」(1948), 『엄상섭전집』 10, 민음사, 1987.
- 15) 大規模事業である辞典出版の危険性や, 順次に配本されていたハングル学会編の『大辞典』の存在にもかかわらず, さまざまな業者と学者たちによって国語辞典が企画されたことには, 英語辞典のヒットが大きく影響していたという証言もある。(이희승, 「다시 태어나도 이 길을」, 『일석 이희승전집 7』, 서울대출판부, 2000, pp.414-415.) 李熙昇によれば, 度重なる「新造語」と時事用語の激増によって語彙数を増やしていくことができ, 語彙の連続的な増加が辞典の連続的な発行を可能にした。
- 16) 이상옥 외 대담, 「한국영문학의 형성; 권중휘 선생을 찾아서」, 『안과밖』 第二号, 영미문학연구회, 창작과 비평사, 1997.
- 17) 설정식, 「신문이 커졌다」, 「송가」, 「포도」, 1948.1. (『越北作家代表文学 14: 薛貞植, 朴世永』, 瑞音出版社, 1989, p.143, p.207.) ことでの共和国が必ずしも「人共」であるわけではない。ただ, この詩集には, 「無心一呂運亨先生が逝去した日の夜」という詩が載っているが, ここで薛貞植は呂運亨が亡くなった次の日の朝を「暗黒の起源」と書いた。
- 18) 薛貞植が「フランシス・ドゥセット」を書いたのは, 米軍政公報部の世論局長についていた時期であった。「공보부확충」, 『동아일보』, 1946.10.9 参照。
- 19) 설정식, 「프란시스·두셋」(9), 『동아일보』, 1946.12.22.
- 20) 광명숙 편, 『설정식전집』, 현대문학, 2011, pp.305-306.
- 21) 정지용, 「『創世記』와『周南』『召南』」, 『정지용전집 2: 산문』, 민음사, 1988, p.217.
- 22) 정지용, 「산문」, 上掲書, p.219.
- 23) 藤井たけしは本シンポジウムの討論の際に, それらの辞典が主に社会主義系列により編纂され, その目的は概して国際的知識の受容および流布, 米ソ共同委員会に代表される国際情勢に対する知識の確保にあったことを指摘してくれた。すなわち, 国際的次元において自分たちの未来が決定されるという状況の中, 新語辞典とは国際的な思潮を理解させ, 党の方針に大衆を順応させるための教養書の性格を持った, 一種の捕獲装置であったというわけである。その指摘は妥当であると思われる。ただ, 脱植民地化, 脱帝国以降の熱望が「群れ」化する過程において, 社会主義の経験と国際主義的ビジョンが込められた新語だけでなく, 米ソ両勢力との直接の対面が解放期の風俗および生活に反映されるにつれ, より広範囲にわたる言語的磁場を形成したのも確かである。たとえば, 「新語」と「新しい言葉」の対立構造から, 国際主義的知識と大衆の力量の弁証法を想定することができる。
- 24) 박·ヒョン익が整理した目録(박형익, 『『신어사전』의 분석』, 한국문화사, 2005.)と韓国教育芸術情報院の全国図書館資料検索システム(www.riss.kr), 오·윤식의解放期韓国図書整理作業(오영식 편저, 『해방기 간행도서 총목록 1945-1950』, 소명출판, 2009)を参考にしてまとめた。最初に発表したものを論文としてまとめた時点で, 民潮社版『新語辞典』と池中世編『新語辞典』を比較した研究が提出されていることを確認した。植民知識の模写と専有, 派生の過程において混在郷として存在した解放期の言語については次

の論文を参照。박용재, 「해방기 신어사건의 문화정치학」, 『상허학보』 제 37 집, 상허학회, 2013.2. これら辞典の具体的目録と解題についての分析は、後日別の論考で改めて検討するつもりである。

- 25) 박형익, 上掲書, p.23. とりあえず, 先行研究の成果を引用する。論文の題材と展開に合う統計を確保中である。
- 26) 以上の内容は, 박형익, 上掲書を参照。
- 27) 金允編, 『社会用語集説』, 發展社出版部, 1946.5.20.
- 28) 文化堂編輯部編, 『主義と解説』, 文化堂, 1947.8.10.
- 29) 『新語辞典』, 民潮社, 1946.5.
- 30) 池中世著, 『最新現代語辞典』, 三文社, 1946.4.15. (1954.2.10 三判)
- 31) 李錫台編, 『社会科学大辞典』, 文友印書館, 1948.8.20. この辞典に文章を寄せた人の名前は以下のように提示されている。「강병도 강병창 강성호 강이홍 고경흠 김덕한 이상형 김완직 김정홍 김종억 김한 주 문일민 백남운 송완순 온락중 윤형식 이광 이복만 이석태 이우적 이철 인정식 임상준 전석담 정종 변 정준변 정해근 정해진 정희영 조동필 주진경 주진구 최익한 최진순 홍기무 홍순직 홍순옥 (補助執筆者一八人は省く)」
- 32) 이시첸코편, 白孝元訳, 『哲学辞典』, 開拓社, 1948.7.15.
- 33) 周知のように, 崔仁勳の「廣場」が発表されたのは1960年(崔仁勳, 「廣場」, 『새벽』, 1960.11)のことである。解放の時間を, その当時において表現したのではないということだ。にもかかわらず, ここで崔仁勳の解放期に対する見方を特別に指摘しておくのには, 二つの理由がある。一つ, 崔仁勳の「廣場」は解放期における理念対立を言語間対立あるいは語用論の対立として再認識した最も典型的な例である。二つ, 作家自らが書いているように, 「あの輝かしい四月がもたらした新しい共和国」があってからこそ, 解放期当代の政治的・言語的対立相が「論争的」な形で表現されえたということを鑑みると, この小説には当代の言語闘争が比較的明確な「痕跡」として残されているためである。付随的には, そのような言語と語用の戦いが対立的な諸概念の中核だけを残したまま漸進的に「ハングル化」する過程を通じて, 「新語」の問題性が文学語の容易性に場を譲る過程を, ある程度確かめることもできるだろう。
- 34) 崔仁勳, 「廣場」, 『새벽』, 1960.11., pp.272-273.
- 35) 崔仁勳, 『廣場／九雲夢: 崔仁勳全集 1』, 문학과학사, 1976 (1993), p.101. 下線, 括弧, 強調は筆者による。
- 36) 上掲書, p.150.
- 37) 上掲書, p.30.
- 38) 上掲書, p.133.
- 39) 최인훈, 「전집판 서문」(1976), 上掲書, p.9.
- 40) 김기림, 「새 말 만들기」(1949), 『김기림전집 4』, 심설당, 1988, pp.196-198.
- 41) 김기림, 上掲書, p.209
- 42) 김기림, 「한자어의 실상」, 上掲書, p. 213.

- 43) 韓国での学会の際, ハン・スヨン先生から世代という要素を当代のウリマル論争に介入させる必要があるとの指摘をいただいた。また, 日本で開かれた本シンポジウムにおける討論の際, 金友子先生から「ウリマル」と在日朝鮮人の言語問題にかかわる貴重な意見を聴くことができた。解放期当代の文人, 学者たちが(そして筆者自身が)「ウリマル」という問題をほぼ自然化された概念, あるいは自明に前提された価値と見なしているようであるが, 時として「ウリマル」自体に「よその言葉」の強要を思い出させるような抑圧が存在しうるということである。とりわけ金友子先生の指摘により, 「ウリマル」を身体化された言語もしくは肉体の言語としてではなく, 強迫のように追い回し続ける想像的価値としてしか所有することがなかった人たち, あるいは回復とは異なる意味での「想像的未来」として追求した人たちもありうるということにも気付かされた。具体的には日本語世代, もしくは海外韓人たちの解放経験はそれ自体, 別途の慎重な言語政治学的検討を必要とするだろう。
- 44) 조르조 아감벤, 『언어의 성사(聖事): 맹세의 고고학』, 정문영 옮김, 새물결, p.13. (=Giorgio Agamben, *Il sacramento del linguaggio: Archeologia del giuramento*, Laterza, 2008)
- 45) 김기림, 「새 말 만들기」(1949), 『김기림전집 4』, 심설당, 1988, p.211.

